

文化

現役の書籍編集者で中国研究者でもある馬場公彦さん(写真)の新著『戦後日本人の中国像』(新曜社、7140円)は、700頁以上ある大作だ。敗戦の年である1945年から日中国交正常化になった72年まで、戦後黄金期の論壇誌から関連論文を総ざらいして、その論調から日本人が中国をどう論じてきたかを明らかにした。馬場さんに話を聞いた。

【鈴木英生】

## 『戦後日本人の中国像』 馬場公彦さんが刊行

馬場さんは北海道大学大学院修士課程で古代中国哲学を学んだ。一時は中国専門書店に在籍し、今回の本で対象にした論壇誌の編集部にいたこともある。これらの経験と、近年改めて早稲田大学院博士課程で学んだことをもとに、仕事の合間にまとめた成果が『戦後日本人の中国像』だ。

本書は当該時期を五つに分けて概観した後、71年の米中接近以降を中心に、日中外交をめぐる議論を詳しく探った。のべ24誌から2554本の中国関連記事をまとめて分析。本多勝一さんの『中国の旅』など、論議の的となった本も扱った。事後的な解釈は排し、各文章の自身を十分に解説しているため、当時の論壇時評

を読み返すような生々しさがある。「大きな発見が三つあった。まず、日本人が中国を見る際の認識回路を身体感覚でつかめた。また、当時の日本人が中国の何に注目し、何を見ていなかったかが明らかにになった。次に、日本の中国侵略を否定する議論は、71年以降に現れたものだと分かった」

日本人は元来、中国に親近感を持っており、戦後は中国侵略に対する贖罪感が強かった。ところが、中ソ論争や文化大革命など、日本人の予見や期待を裏切る事態が次々に起きた。日本側は戸惑ったが、中国からの情報が少なかったこともあり、こうした事態を「本当の中国、日中はこうであ

# 論壇誌24誌の記事2554本を分析 国交正常化までの論調探る

ってほしい」と読み替えて論じたり、「現状は不透明でも、あえてこう解釈する」と決断したりした。

たとえば、64年の中国の核実験。対米依存から抜け出せない日本と比べて、米ソの核の独占に抗した、と好意的に見る人がいた。同様の好意的な解釈は、文化大革命についても見られ



存欲求に基づいたものだった。論者も、政財界の要人から元日本兵、社会主義者、新左翼まで、幅広かった。一方、現在の論者は事実上、現実主義的な中国ウオッチャーに一本化されている。日本の知識人にとって中国は、自らの運命を託す「内なる中国」から、単なる観

言説はどうか。馬場さんは「戦後のあらゆる右派が共通して抱いていた考えに基づくもの、と見るのは誤り」という。71年以前は、共産主義国家の現状への批判はあっても、中国の国家自体や文明体系への非難、日本の侵略を否定する意見は、ほとんどなかった。

右派も贖罪意識が強く、侵略への報復を戒めた蒋介石に恩義を感じていた。「国交回復の条件として戦時賠償の義務を負うことは拒否したい。そういう切羽詰まった思いから、苦し紛れに生み出されたのが反中言説なのではないか」

そして、今。本書の扱った時代と比べて、日中間の情愫の往来は増え、相互依存も深まっている。双方の国民世論が日中関係を動かす主要因になってきた。「だが、情報の増大がそのまま相互理解の深まりにつながることは、必ずしも言えない」

真の相互理解には何が必要なのか。それを探るうえで、1347人もの識者の言説をよみがえらせた本書は参考になるはずだ。

る。それは、毛沢東の後継者とされた林彪の失脚などで文革の実態は権力闘争と誰の目にも明らかになる71年ごろまで続いた。

確かに、当時の論者の多くが中国を見誤った。しかし、彼らにとって中国を語ることは、「主体的に終戦処理をして、民族の独立を成し遂げよう」という切実な生

察対象へ変わったのだ。かつての論者が中国について、ほとんど見ていなかった部分もある。それは少数民族と台湾だ。少数民族関連の論者は、チベット動乱があった59年の十数本だけ。台湾関連の記事も、台湾海峡危機の起きる54年まではほぼなかった。

それでは、いわゆる反中